

# 緒 言

紀要編集委員会

本学には、他大学を含む大学での豊富な教育経験や、大学以外の幅広いフィールドでの社会経験を有する教員が在籍している。重鎮たる彼らは、自身の経験を本学での教育にどのように生かしているのだろうか。あるいは今後どのように生かしていきたいと願い、本学の今後にどのようなことを期待しているのだろうか。

教育の現在と未来を考える上で彼らの見識に学ぶべく、このたび紀要編集委員会は本特集を企画した。寄稿を依頼した教員には特集の趣旨を念頭に置いたテーマをそれぞれ設定して自由な見解を述べていただくこととし、各々の専門に引きつけた論考も歓迎する旨を伝えた。

執筆者各位は企画の趣旨をよく汲んでくださり、瑞々しい報告、そして示唆に富む提言をお寄せくださった。いずれも多様な〈現場〉の息吹を伝える論考である。終わりのない議論がこれから始まることだろう。

## 教えること、教えられること

大 野 実（表現文化学科特任教授）

「社会経験のある大学教員」という言葉や在り方が、一般的になったのはいつごろだったのだろうか。私自身のことでは、**「大学の先生」という職業に「なりたい」とか「自分に当てはめてみる」とか**思ったこともなく、遠い、無縁の存在だった。従ってどうすればなれるのかとか、何を準備しなければならないのか、どんな資質が要求されるのか、等々の問いは頭の中に浮かぶことすらなかった。

今ネットで調べてみると「社会人から大学教授になる方法」とか「ビジネスマンが大学教授、客員教授になる方法」とかの本が出ていて、「大学教授公募の裏側」も教えてくれるらしい。ここから類推するに、社会人から教授への道はそう珍しいことではなく、少なくとも一般の関心と呼ぶテーマにはなり得ている、ということだろう。これらの本は読んだことがないので何が書かれているのかは知らないのだが、今回執筆依頼の文章の一部にも「自身の経験を本学での教育にどのように生かしているか、今後どのように生かしていきたいか」とあったように、「社会経験（つまりは仕事を通じて得られた知見）を踏まえ、それをもとに教育する」ことが期待されている、求められている……といったあたりで大きな間違いはないだろう。

つまり、本来の（専門分野で深く学び真理を探求し論文にまとめ修士なり博士となって大学で教えるようになる）教員との違いは、昔風に言うところの「象牙の塔」ではない場所で、研究に代わる実践をどのようにしてきたのか、その経験を学生にとって有用な教えにどう進化させていくのが重要なポイントになっているのだろう。しかし、自分の場合教員になろうという意思がそもそもなかったため、そのような観点で「次の職業」のための助走として仕事に取り組むことはなかったし、それが教育につながるのかつながらないのか考えてもみなかった。